

に、和氣清麻呂の如きも亦大楠公と同じ精神に生き、同じ意氣に生きた誠實の人だつた。

故に澹泊は「和氣清麻呂傳贊」において、さうした意味に觸れ、「所_レ貴_ニ乎忠鯁之士_一者、以下其不_レ爲_ニ利回_一、不_レ爲_ニ威懼_一、凜乎如_雷霜烈日也」と云つた。また大楠公の威烈、高風については、心から欽仰して、「其忠義之心、窮_ニ天地_一、互_ニ萬古_一、而不_レ可_レ滅、身雖_レ死而其不_レ死者」と讚美した。更に「新田義貞傳贊」では、忠道への熱情を披瀝すると同時に、その美しく、清い精神が、深く世の教化に資するところあることを確言したのである。

以上によると、忠義の精神は、不滅であり不死である。それは時間を超越して、永久に生き、更に後世の人心の上に力強く作用するわけである。のみならず、忠義を盡した人々の上には、必ず正しく酬はれるところがある。即ちそれは生前においてか、又は死後においてか、名譽の上で酬いられることが明白だ。澹泊の所信は、大要、以上の如くであつて、彼れは、それを論贊の上に表白することに力めたと云へる。

唯澹泊は、大楠公を始め、結城宗廣、兒島高德、名和長年らの誠忠に言及しながら、菊池一黨（武時、武重、武光ら）の忠義について言及しなかつたのは一つの手落ちであらう。菊池一族

は、九州方面で、勤皇に盡して、中央から遠ざかつてゐた爲めに、閑却せられたのであらうが、一族擧つて勤皇に殉じた最期は壯烈である。山陽の如きは、この事を知つて、詩の上にこれを讚美したが、澹泊が茲に言及しないので、菊池一黨について、別に一篇の傳贊を作らなかつたのは、恐らく當時十分に史蹟の調査が行きわたらなかつたのであらうか。それとも、澹泊の注意が届かなかつたのであらうか。

要するに澹泊の論贊は、大體において、立派なものであるが、右の如き不満は、必ずしもないとは云へぬ。また時に見方が偏狭に失し、冷酷に流れたやうなところもある。けれども澹泊が義公の旨によつて、主として、この方面に全力を傾け、「大日本史」の紀傳と相俟つて、大義名分の精神を宣揚した功勞は、十分に認めねばならぬ。勿論、その口吻に儒者臭があり、文章に術學的なところがあらうとも、雄健、雅醇の筆を以て、勸懲の意を達したところに、論贊の使命を略々全うしてゐる。惟ふに、頼山陽の「日本外史」「日本政記」に於ける史論なども、確かに澹泊の論贊から影響を受けた跡が見られる。この意味において「大日本史」の論贊は、過去の史界に重要地位を占むる一つだとしなければならぬ。

一種の文化史

論贊と併行して、『大日本史』の精神を發揮したのは志類である。志といふのは記録のことであるが、この場合、文化若しくは文明現象の記述を意味する。平たくいへば、一種の文明史、乃至、文化史と見て差支ない。唯その統一に缺けてゐるだけである。蓋し紀傳は横に國史について敘し、志類は縦に國史について記したものと見られよう。紀傳は平面的であり、志類は立體的である。即ち彼は相俟つて、歴史の全面容を形造ると同時にそれを表明する。

従つて、水戸の史官は、平面的な紀傳にも、相當、苦心したが、立體的な志類については、これに倍する困難を體驗した。それ故、修史上、最も老成の大家といはれた安積澹泊も、志類については、澁面を作り、「修史既難、修志尤難」と嘆息し、また、「修史之難、無_レ出_ニ於志。誠以志者、憲章所_レ係、非_レ老_ニ於典故_一者、不_レ能_レ爲也」とも云つてゐる。蓋しさうした方面の文獻は、容易に手に入り難く、且つ當時は、かゝる研究を爲しなものが極めて少なかつたのである。

従つて、澹泊すら執筆難を叫んだ志類を、最初から具合よく纏めたものは殆どなかつたと云つ

てよい。志類の完成が遷延に遷延を重ねたのは、主としてさうした事情に基づく。こんな具合で、志類については、半ば以上、支那史に於ける行き方を參酌したが、中には、支那史にさへないものがあるので、独自の工夫をしたものがある。それに依つて見ても、志類編述の困難が想像せられよう。今、その大體の進行形態を見ると、凡そ左の如くであつた。

(第一) 神祇志は、古來、その名があつたが、著述全くなく、水戸で始めて執筆した。

(第二) 氏族志は、義公が史官に對して、別にそれを一志とすべき山を命じ、着手することになつた。

(第三) 職官志は、最初『後漢書』『宋書』の例により、百官志としたが、後に、本題の如く改めた。

(第四) 國郡志は、始め地理志としたが、後、本題の如く改めた。

(第五) 食貨志は、先づ明史の『食貨志』による事としたらしい。後に至り『新唐書』の書き方を參酌した。

(第六) 禮樂志は、支那風に禮儀・輿服・音樂の三志としたのを、後、かく一つに合併した。

(第七) 兵志は最初、兵馬志としたが、後に至り、かく改めた。

(第八) 刑法については云ふべきことがない。

(第九) 陰陽志は支那式に曆・天文・五行の三志としたのを又一つに合併した。

(第十) 佛事志は、佛教志と云つてゐたのを、かく改稱したのである。

以上は、今日、『大日本史』に收められてゐる志類についての推移及び歸着迄のことを述べたのであるが、事實、かく確定するについては、一再ならず、曲折を経てゐる。のみならず、當時、水戸では、この方面の學者に乏しく、従つて仕事の遅延を重ねた。そして之を取纏めるについては、豊田天功、栗田栗里の力に俟つところが最も多かつた。

さて、『志』第一に概説した趣旨を見ると、先づ日本國體の優越を説き、すべての古代文化こそ、外來の分子を加へることが少なく、純正日本精神の要素を多分に持つことを述べてゐる。つまり、それは、日本の神話時代から神武天皇の建國時代にかけて、日本の精神文化が相當、卓越したことを認めてゐるのである。即ちこちたき議論などは一向なかつたが、自然に道が一般に行はれ、清く朗かな生活を具現したと見てゐる。それは一種の尙古主義とも、又古代理想主義と

も云へよう。この點において、水戸史學派の傾向は國學の傾向と酷似する。

勿論、尙古主義と云つたところで、それは回顧的、保守的な意味で爲されてはをらぬ。天功、栗里らの期待するところは、尙古主義を前提としての皇政復古だつた。言ひ換へると、古代における天皇御親政時代への仰慕であり、憧憬であつた。そこには、覇政のもとにゐる國民生活の重壓に嫌らないで、天皇親政時代への復歸を考へたところの傾向が看取される。かうした意味において、文化の復古を希ひ、復古から一轉して一君萬民の政治のもとに、新しい世界を作り出さうといふ心持が志類の筆者の胸に動いてゐたと思はれる。

志類において、水戸學派が最も重きを置いたのは、神祇志である。古代日本においては祭政一致であつて、マツリゴト即ち政治、政治即祭事だつた。言ひかへれば、神を祭る心を以て、政治を行ひ、敬神崇祖が政治上の重要事でもあつた。従つて、神祇は日本國體と不可分の關係を有するので、志類の最初に、神祇志——日本神道史を置いたわけである。故に『神祇志』の筆者は、「夫祭祀者、政教之所本、敬神尊祖、孝敬之義、達于天下、凡百制度亦由是立焉」と云つてゐる。

それから日本國體の神髓に言及し、「天皇以天祖之遺體、世傳天業、群臣以神明之胄裔、世亮天功。君之視民如赤子、民之視君如父母。億兆一心、萬世不渝」と云つた。即ち皇室は、日本國民の總本家で、國民はその分家ともいふべき状態にある。その間における關係は極めて密接で、大規模の家族ともいふべき有様である。かうした緊密な結果は、日本のみに見る現象といつてよい。加ふるに、道義建國の精神を具現せらるゝ皇室の天業について、國民全體が之を助成しまゐらせる熱意に満ちてゐる。志類の筆者は、さうした意義を「神祇志」に述べ、祖國愛にもとづく國體觀念を表明した。

以下、志類は、各志（氏族・職官・國郡・食貨・禮樂・兵志・刑法・陰陽・佛事）において、文明、文化の推移・變遷・進歩について語り、その考證の點では、可なり力を入れてゐる。そこに幾分の聯絡を存するが、その綜合、大觀に缺けてゐるのが少しく物足りない。且つ排佛敎の態度を執り、佛敎が「顛倒本末、毀損國體」といふ有様に墮したことを非難してゐるのも、少しく偏つたところがあると云はねばならぬ。

復古的傾向の強調

既述した如く、志類の筆者は、熱心に皇政復古を欲求し、且つ古代文化に對する憧憬の熱情を最も強くいひ現はしてゐる。従つて、どの「志」においても、大抵政權が武門に歸した結果、氏族も、職官も、禮樂も、その他一切が紊亂して、國體精神に背馳するに至つたことを長嘆した。同時に、かゝる情勢を導き出した藤原政治及び文弱化した公卿に一撃を加へ、更に佛敎が純正日本精神を害したことを幾度も繰返して非難してゐる。

結局、志類の筆者は、「古代日本精神に還れ」「純正日本精神に目覺めよ」と云ふことを根氣よく、幾度も繰返してゐる。その結論として、必然に來るのは皇政復古であり、天皇御親政であらねばならぬ。

惟ふに、藤原政治及び武家政治は、一概に短所、弊所のみを以て終始したのではない。例へば、平安文化の發達は、一面、藤原政治に負ふ所があり、鎌倉時代の善政は、北條氏の努力による。その他、武士道の發達の如き、軍事上の進歩の如き、武家政治の所産だと云へる。

けれども藤原政治は、その一家、一門の利益擁護に傾き、國民生活とは殆ど没交渉に近かつた。のみならず、地方民から平氣で搾取したのである。殊に文弱の弊が甚だしかつたのは、大きい缺陷だつた。それから武門政治は、武健、質直の風を興す上で、治安維持の上で、藤原政治に優つたが、やはりその一門を中心に、武士階級の利益を代表することに傾いた。従つてこれも亦庶民から搾取することを敢へてしたのである。

また他面から見ると、所詮、日本の國體上、藤原政治、武家政治の存在を否定しなければならぬ。會澤正志が嘗て『下學通言』で、「一君二民」と云つた如く、第一に天皇、第二に國民で、その間何らの介在をも許さぬ。即ち天皇御親政の下に、文武の大權を統一せられ、心から神道を尊び、國民を愛撫せられるのが、本來の傳統である。そこに中正、公明の旨が發揚せられ、すべての階級を通じて、幸福を享有する。それ故、志類の筆者は、心から皇政復古を熱望し、天皇御親政時代の再現を渴望してやまぬ。

従つて志類では、古代の皇政のもとに生活した時代を最も理想的なもの、最も公正を得たものと爲した。例へば『食貨志』では、佛教渡來以前の國民生活が、何の苦勞もなく、のんびりと行

はれたことを記述すると同時に、佛教渡來以後は、次第に行詰つた様子を表示した。勿論、それには直接、佛教の罪ではなく、國民の上における傳統性の美を打破つたことによる。茲に排佛主義の色合が浮び出てゐる。

志類の筆者は、又禮樂の如きも、何故にくづれ出したかといふことを究明し、結局、それが、支那摸倣にきざした所以を論述してゐる。殊に公卿の支那心酔と軟弱化とが、その誘因たりしことを遺憾とし、「禮樂壞於上、征伐出於下」となつたのを嘆いた。要するに、日本精神の純粹性を失つて、誠實の心、朴直の旨を減じたことが、やがて、禮樂の廢頽を招致したといふのである。

それから氏族の紊亂した所以に至つては、藤原氏の專權に端を發し、武家が勢を得るに及んで、これを増大したことを『氏族志』に述べてゐる。蓋し藤氏・橘氏・源平二氏などが天下に伸びて、權勢を張り、豪族が四方に割據して、朝命を奉じない結果、氏姓の亂れを深め、ひろげた。それが動搖絶え間なき室町時代に至ると、一段、激化したことを慨嘆して、「士離桑梓、家喪譜牒、其誤認他姓、妄攀華貴、牽強附會、以誣其祖者、不可稱計」と云つた。

かく見來つた所によると、志類の記事は概ね主觀的に爲されてゐるかの如く、考へられるかも知れない。が、必ずしも左様とは云へぬ。『佛事志』以外は、概説を除くと、客觀的敘述を主とし、公平の旨に従うてゐる。即ち各志において、その主題とする事柄の變遷、推移を明かにし、殊に考證に力を入れてゐる。

唯茲に注意を惹くのは、各志が春秋的筆法を各處に用ひてゐることである。即ち紀傳、論贊に呼應して、大義名分の上からは、容赦せず、寛假しないで、直筆してゐる。かうした行き方をした文化史は他にあるまい。それは、いかにも嚴肅だ。また峻峭だ。そこに犯すべからざる何物かあるやうに思ふ。例へば、『職官志』では、藤原氏及び源平二氏のために、その紊亂を招いたことを記し、大寶以後、漸次、弊害を深めた旨を痛切に語つた。また『食貨志』では、貞觀の頃から行詰りを生じた所以を敘し、虛文と奢侈とが錯綜して、經濟上の紛亂を招き、佛教心醉などが之に油を添へたことを述べた。殊に武門の手に成つた覇政が、一段とこの方面に禍したことに及んでゐる。

水戸史學派が見た人文變遷の一端は、以上の如くである。要するに、結局、水戸史家は、志類

をとほして、天皇御親政時代を渴仰し、尙古主義、乃至、復古主義を強調してやまない。かくして天皇仰慕の熱情を披瀝して、天皇中心主義を高唱し、一君萬民のもとに、善政の實現を熱求めた。故に國教たる神道については、最も詳しく述べ、紀傳で觸れなかつた神代のことにも及んで、委曲を盡してゐる。その結論として生れたのが祭政一致の精神だつた。

それで志類の筆者は、「上古聖王、將_三大有爲、則發_レ號施_レ令、必本_三於神祇_一」とした。そこに尙古主義的精神に伴うて、政教一致を必要とする所以を説いてゐる。勿論、志類では、まだ徹底的に古代研究を十分、爲すところまで至つてをらぬけれども、マツリゴト即政治の意義については、極力闡明に力めた。この點において、志類の思想的意義が察知せられよう。

古代に還れ、政教一致の精神に還れ！ この標語が、志の中樞思想であつた、と云つて宜からう。それは、論贊の傾向にくらべて、より理想的である。

第八 水戸義公の政教一新に對する考へ方

思想上の先驅者義公

水戸學の二分野——水戸史學と水戸政教學とは、どんな交渉關係を有したか。「大日本史」を中心とした水戸史學が尊皇精神發揚に多大な寄與をなしたことが、或意味に於いて、水戸政教學の成立を豫約するといつてよい。一步進めていふと、水戸政教學は、水戸史學の母胎から生れたのである。

以上の點を明白にするについては、水戸史學の中堅を形造つた人々の思想を點檢して、之を水戸政教學の經典、「弘道館記」と對照することを捷徑とする。今、義公のかうした方面の思想を檢討しよう。

惟ふに、水戸義公は主力を「大日本史」に集中した爲めに、政教革新に就いてはその理想、抱

負の半ばをも實現するに至らなかつたが、政教革新に關して、相當、熾烈な熱意を有したことは申す迄もない。彼は詩文人としても、學者としても優に一家を爲したが、同時によき政治家であり、よき教育者でもあつた。而も彼は、卓拔な識見、旺盛な創造的才能を有し、日本國體觀念の上に起ち、皇道を基本として、一切の革新を意圖したのである。

惟ふに「西山公隨筆」によると、義公は思想上、何事にも、独自の解釋を下した事が分る。和田萬吉博士は、「西山公隨筆」を義公の著作かどうか分らない意味（『日本文學大辭典』参照）を簡單に記してゐるが、それは誤りである。何となれば義公在世中、長く之に仕へた安積澹泊が「西山遺事」中に、その主要な部分を漢譯してゐるのを見ると、義公自身、之を筆にせぬ迄も侍者に語つたと思惟されるからである。

義公は「西山公隨筆」中で「浮屠氏旦那を教化せんとならば、まさか如法如説なるべし」といひ「暴虎馮河し、死して悔なからんものは飛蛾の火に赴くが如し。よく死せりといふとも、何の益かあらん」といひ、「儒者に異端あり、聖人の道を開きつゝ、甚だ固滯にして物理に通ぜず」といひ、更に「俗人は何事も聖人の知らざる事なしと思ひて、聖人を奇異に説きなすは偏見なり」

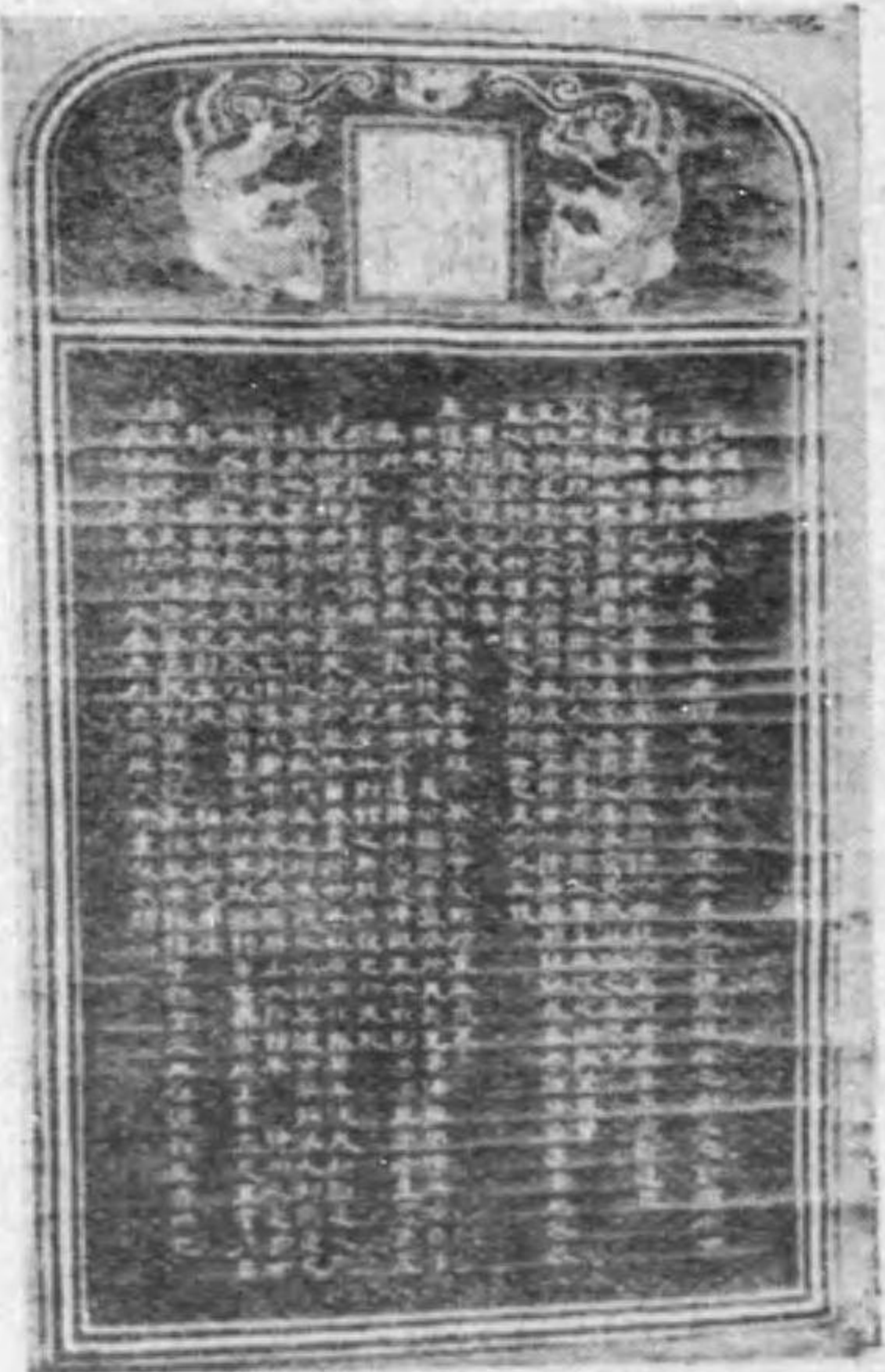
といひ、「君子すこし疵ある事多し、其非を捨て、其名言をとる」といふ。その何れもが義公の獨創的な考へを披瀝して、當時の凡俗の、想ひ及び得ない所に觸れてゐる。

殊に義公が「毛呂己志を中華と稱するは、其國の人の言には相應なり。日本より稱すべからず。日本の都こそ中華といふべけれ、何ぞ外國を中華と名づけんや」と言つた言葉は、概して無意義的に支那文化を崇拜した當時の儒者とくらべて識見上、特に優れてゐる事が分明である。義公は儒學を尊重する事に於いて決して人後に落ちなかつた。彼は「孔子像贊」(常山文集卷之十九)を書いて、「上古神聖、俟_二夫子_一名。後世君子、俟_二夫子_一成。夫子之道、與_二天地_一享。夫子之德、與_二日月_一明。」と迄云つた。けれども之がために、支那文化に心酔して、華夷、内外の辨を忘れる事なく、皇國日本の道を崇敬し、日本の精神文化を尊重して、日本の立場からは、日本を中華(文化最上の國)と稱すべき旨を主張した。茲に義公の明確な日本的自覺と超凡の見解が光つてゐる。

以上の點に考へ及ぶと、水戸義公の抱懷した思想が、後の水戸政教學の要素となつた事が少くないのを推想し得よう。たとひ、それが組織的でなくとも、大體において、水戸政教學の要素を

包有したと見て差支えないと思はれる節が隨所にある。

既に一般に周知さるゝ如く、水戸政教學の經典は、「弘道館記」である。之が註解は藤田東湖の「弘道館記述義」、會澤伯民の「新論」及び「下學適言」などである。そして本來、弘道館は義公の遺意を奉じて生れ來つたのであつた。義公は教育に熱心で、率先、士民の教養に關して平生深く注意し、精神開發に資す*



弘道館記石捐

※る所があつたのみならず、その著「西山公隨筆」に於いて學校を建設すべき必要を力説した。

遺法にして道の本とする所なり。書を講じ、道を教へ、俗を化し智を開かしむる教へ、是より大なるはなし(西山公隨筆)

この語は「中庸」第二十章に於ける語——「誠者天之道也。誠之者人之道也」及び「博學之
審問之、慎思之、明辨之、篤行之」の思想を背景とし、且、同書第二十九章の語——「君子
之道本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不繆」の考へに依る所がある。少くとも、其處から暗示
を得た點があると思惟せられる。即ち義公は、支那に於ける夏・殷・周三代に互る聖王が學校を
重んじ、教化を旺んにした事を欽慕して、その本づく所が、誠を中核とする天道にありとし、日
本に於いても學校を創設して、智徳開發に努力せねばならぬ事を痛感した。

惟ふに、當時の諸侯中、以上の點に想到した者は、僅々一二に過ぎなかつたが、義公はその極
めて少い先覺者の一人であつた。唯彼は、その全精力の大半を『大日本史』に傾倒した爲めに、
その一生の中に於いて、學校を創設する迄の餘裕を有せず、空しくその志を地下に齎したが、烈
公の時代に至り、始めて、義公の遺意を實現する事が出來た。故にこの意味からも、義公の思想
が水戸政教學と最も因縁が深い弘道館建設に對し、密接な交渉を有したと見ることが出來よう。

皇道發揚

次に義公の思想と「弘道館記」の示す内容とを對照すると、義公が夙にその諸要素に觸れてゐ
たと解せらるべき點が少くない。「館記」は、自然界、人間界を一貫する宇宙の根本理法——大道
を基本として、(一)尊皇攘夷、(二)忠孝一致、(三)文武不岐、(四)神儒調和、(五)學問、事業の
一致、(六)舉國報恩などに觸れてゐるが、以上のうち、攘夷を除く以外の各要素は、略々義公の
言説及び行動の上に徴する事が出来る。

惟ふに、義公は尊皇に立脚しつゝも、自由、寛大な態度を以て、内外の諸思想に對した。それ
は、彼自ら撰した碑文に於いて、「其爲人也不滯物、不著事、尊神儒而駁神儒、崇佛老、
而排佛老」と云つたことによつて判明する。

彼は博學で儒教を研究し、佛教、老莊學にも及んだ。が、之に心酔する事はしなかつた。神道
に對する場合でも同様である。即ち彼は、思想の内容を豊富充實せしむるがために、尊皇精神の
統制下に、諸思想の長を採り、短を捨て、中正、不偏の旨意に徹したのである。「尊神儒」とい
ひ、「排佛老」といふのは、皇國精神の上から見て、その非とすべき點を排する意味で、その長
とし、是とする所は之を尊重した。そこに義公の内外思想に對して執つた公平、無私の心と自

由、寛大な態度とが反映されてゐる。

故に彼のもとに於いて『大日本史』の編述に従事した史官は、思想上、必ずしも、皇道に立脚する者のみを最初から選んだのではない。曾つて佛教に歸依し、傾倒した佐々十竹、森儼塾の如き學者もをれば、又、仁齋門から出て古學派を繼承した大井松隣の如き者もゐた。更に莊子の哲學に共鳴した人見卜幽の如き士もゐた。が、義公の強烈な思想的感化は、おのづから彼等を尊皇主義に歸趨せしめたのである。十竹の如きは水戸に仕へて以來、熱烈な日本主義者となり、儼塾の如きも佛教から離れて、『二十四論』を書き、日本民族文化の長所を發揚した。随つて、『大日本史』編述に従事した史官は結局、いづれも尊皇精神に立脚したと云へる。

以上によつても、義公が思想家として、時流を抜いたのみならず、皇道の先覺者として代表的な一人であつた事が推想される。従つて彼が『大日本史』の基礎、根幹、組織を生前、略々成就したのみならず、その政教上に於ける識見は、おのづから、後の水戸政教學に向つても、有力な素材を供給したであらう事は想察に難くない所である。そして、此の方面に於ける義公の思想を考察すべき資料としては、『西山公隨筆』『義公命令』『常山文集』などが存在する。

先づ『弘道館記』を見ると「弘道者何、人能弘道也、道者何、天地之大經而生民不可須臾離者也」とある。即ち水戸政教學の諸要素を統一する根本原理としての「道」なるものが説かれてゐる。それは一般的に宗教、哲學に共通する傾向で、ひとり、『館記』の特有する者と爲す事が出来ぬと思惟されるかも知れぬが、之が註解を爲した東湖の「館記述義」によると、それは一般的具象化の意味に於いて、「天日」（太陽）を指し、民族的意義に於いては「天祖」（天照大御神）を指し奉る事が分る。其處に一般的に宗教哲學の根本原理として抽象的に説かれてゐる通念と異なる點がある。單なる抽象理念だけだとすれば、そこに生々活動的な旨趣を具現し來らない。が、『述義』の如き意味に於ける具象的な根本原理とすれば、生々活動的な旨趣を帯び來ると同時に、日本民族に見る特殊的色彩が加味せられるのである。

以上の如き水戸政教學の根本原理とした「道」の考へは、『常山文集』中にも見出すことが出来る。勿論、それは、東湖の考へた如く、具象化せられたものではないが、少くとも、義公が道徳の根本原理の存在を必然とした事が、「一説」（常山文集卷十九）の上に現はれてゐる。

一之爲義也、吁嗟至哉、不可得而言焉、推而說之、則道也、理也。無極而太極、乃一而

已。易曰、太極生二兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦成三六十四卦。無物而不易、無事而不。日月星辰、得之以輝、人獸草木、得之以生、森羅萬象、無不自此流出矣。(下略)

如上、義公の言ふ所は、一般的な「道」の通念ではあるが、多にして一、一にして多なる宇宙の理法に看到してゐた事を推想し得られる。故に道についての思想に關して、水戸政教學に説く所の如き民族的色彩の鮮明はないにしても、義公の思想中早くも、水戸政教學の統一原理を胎生してゐたと解しても、一概に早計だとは云へぬであらう。

次に、「道」の根本原理のもとに統一せらるゝ所の水戸政教學の諸要素も、極く大まかではあるが、概して義公の言説中に見出す事が出来る。その尊皇思想は「大日本史」に結晶してゐる以上、特に茲に觸れる必要はない。且、攘夷といふ事は、義公時代に於いては、まだ痛切に考へられなかつた點であるから、これらは水戸政教學に説かれた幕末非常時と同一視する事が出来ぬ。即ち、義公が攘夷の説を表明してゐないのは、時代の趨勢によるのである。

が、當時、邪宗門として幕府が極力、排撃した切支丹思想については、尙かに之を研究し、國教上之を排せねばならぬとして、用意を怠らなかつた事文は略々推想し得べき點がある。當時、

義公が文庫中にあつめた耶蘇宗書目によると、「七克」「天主實義」「天主實義續篇」「續崎人傳」「西學凡」「譯實有詮序」「二十五言」等三十餘種に上つてゐる。かくして義公は、排耶蘇の學的理由を見出す事に努め、合理的に之を批判しようとしたのであつたらう。

それから義公が忠孝一致、その他の諸要素に觸れてゐる事は申す迄もない。惟ふに、忠孝一致といひ、文武不岐といふ事は、古來、名將、國士、學者らが屢々説いた所で、水戸政教學の創見ではない。又學問、事業の一致といふ事も度々説かれ、神儒調和の考へも、林羅山らの夙に述べた所である。この意味からすれば、水戸政教學の内容は寧ろ平凡に近いと言へる。

けれども一方から考へると、必ずしも然うではなかつた。それは非常時に當つて、思想界が激しく動搖し、道徳と云へば、儒教流の考へが多く述べられて居た時、國民道徳の内容を総合的に規制し、それによつて、國民思想の統一を計らうとした所に一つの意義を有してゐた。のみならず、「館記述義」に於いて説かれた各要素の解釋は、何れも前人の説き及ばぬ所に觸れ、言々句々適切、清新である。この意味からすれば、水戸政教學が総合的に主張した國民道徳の内容は、在來のそれと異つて、調和機能の作用を效果的に示し、且、新意義を帯びてゐる事が分る。

死生の道と忠孝

今、一々以上の點を闡明する事は、本文の主意とする所ではないから暫く之を擱き、以上、水戸政教學に先驅した義公の思想を點檢する。義公の説き方は、彼の個性を帯びて、獨得の味がある。彼は決して月並式な説述をしない。何らかの意味で彼の自得した點を發揮するのを常とする。故に彼は「義公命令」に於いて、臣下に向つて忠を説くに當り、第一に諫言を求め、硬直な臣下の意見こそ忠道に合致する所以だとした。即ち彼は阿諛を斥け、甘言を斥け、君臣一致して、善政を布くためには、何よりも諫争の言を必要としたのである。

(前略)自今以後、某も各と互に善に進み、惡を改め各は古の忠臣義士にも不_レ恥、某も明君賢主の跡をも慕ひ、後代迄も君臣共に能ためしにひかれ候様にと、眞實に存入候。各も某が心底を能々推察いたされ、營々被_レ加意見、諸事さし置き頼入申す外、無_レ他候(義公命令)
いにしへの聖賢の君さへ、群臣の諫を求め玉ふ。況や某如きの者。先祖の積善によりて君位にのぼり各の上に居るといへども、生質不肖にして、君たるの道にたがひ、各の心に背かん事を

朝夕恐入候。某身の行ひ、領國の政、諸事大小によらず、少も宜からぬ儀、又は各知寄たる儀、遠慮なく其儘可_レ被_レ申聞_二候。(同上)

以上は藩主の立場から、忠道の一面に言及したのであるが、彼は進んで、忠道の根柢に横はる至誠の涵養を特に力説し、「口に偽をいはず、身に私を不_レ構、心すなほにして外に飾なく」といふ事を平生の嗜みとせねばならぬとした。かうした素養があれば、節義の旨を體現して、忠道に背離するが如き事は斷じてないと確言してゐる。

更に義公は忠道の具體化した一例として漢紀信の事を擧げ、司馬遷が「史記」の中に、紀信の傳記を收めなかつたのを非常に遺憾とした。忠臣の事跡はたとひ、はつきり詳しい事が分明せずとも、別に小説的興味がなくとも、力を入れて、必然、之を傳へねばならぬと云ふ旨を高調してゐる。

司馬遷「史記」を見るに、忠臣、義士、功名高き人の傳は、委敷是を載す。然れども漢の紀信は高祖の身がはりに立て、身を火に亡せり。當時、紀信なかりせば、高祖の命は保ち難らん。かほどの大忠臣を何とて列傳に載せざるや。或人云ふ、紀信は只此一事のみにて、其外の事實

知れざる故に特に傳をたてず。是大なる誤也。(西山公隨筆)

以上、義公の忠道觀の一斑である。それから義公は、孝道を始め、兄弟、親族、朋友の間の道をも重要視すべき事を、『義公命令』中に簡明に約説した。

茲で一言して置きたいのは、義公がお座なり式にかく云つてをらぬのみならず、深く人生問題を思索し、死生の道に關しても、切實な感想を披瀝してゐる事である。人間に取つて死生の道は一番大切とされてゐるが、義公は、生に善處し、死にも亦善處すべき必要を最も簡潔に表明してゐる。

人先づ死生の間、不可苟免、不可増減、事を知らば、塞欲克己に於いて、甚だやすかるべし、棄義貪利の惑ひは、歸生の道に味が故也。(西山公隨筆)

生も必然であれば、死も亦必然である。生について考へる時、生の大事たる道德——人間としても最も正しく、最も美しく生きる道を考へねばならない。同時に、武人として萬一の場合を考へて、最も正しく最も美しく死ぬる道をも自覺しなければならぬ。即ち忠孝、節義を如何に死生の間に全うするかと云ふ事は、生死を必然だとする見解の上に築き上げられる。かくて義公は、

道學先生的でなく、五倫・五常について説くと同時に、人生の重要問題たる死生の道に關して、平生の用意を説いたのである。

文武一體主義

義公が『館記』の文武不岐といふ思想について早く説いた事は、『義公命令』中に「凡そ家中の士、不擇貴賤、學問を可致候」家中の士、武備を忘れ間敷候」と云つたので分明であるが、その説き方は義公一流の見地によつて解釋し、平凡ではない。即ち文——學問に關しては、「學問とは別に替り申義には無之候。人たる所の道にて候。」と適切、簡明に教示した。蓋し當時の學問は今日の如く複雑でなく、且、内容上、主とする所は道義の上に存したからに他ならない。勿論、義公は、學問上の分科的方面にも言及し「それ學問に三つあるべし。性理なり。經濟なり。詞章なり」と云つた。性理とは今日でいへば、倫理學・道德學の事である。經濟とは、政治學をも含んだ意味である。詞章とは、國漢文の事である。

以上の如き區別はあるが、義公は、性理も經濟も詞章も歸する所、人の道をよく盡すといふ事

に存すると信じた。且、それらの神髓・中核に觸れて、之を生かして行くべきで、末梢的に流るべきではないとし、「俗儒の記誦のみを事として治亂を知らず、成敗をわきまへず、武實を捨て、詞華を唱ふ、我とらざる所也。」(西山公隨筆)と注意した。即ち文學的に一方に偏り、武道を輕視する事を非としたのである。

更に義公は、文道によつて、武士の任務を完全になしとげる事の出来る效果及び意義に言及し、「夫れ士の大切に頼んで臨んで、嫌疑を定め、戰場に臨みて勝敗を明らめ、生死を決し、義理を分つ。學問に非ずして、抑もまた孰ぞや」(西山公隨筆)といつた。この點から見ても、義公が文道を心から尊重した事が明かである。

次に義公は、武道について、彼一家の解釋を端的に説き、「武備とは分限相應に人馬其外、武用の道具所持致し、射騎劍鎗の技術も不案内に無_レ之程に稽古可_レ有候。軍法は常に僉儀可_レ有事に候。」(義公命令)といひ、更に以上の用意を日常化するに關して、「武術を忘れ申さ_レるは、平生の嗜にて候。常體にやすらかにいたし罷在候て、然も其心得可_レ有事に候……武士の嗜は心に有る事に候。仕形に有る事にては無_レ之候。されば能士は姿、物言ひ却てやはらかに、少しの出入

には、心をかけず、大形は堪忍を専らといたし候」と武事の皮相を離れて、武事の本質に想到すべき旨を強調した。殊に義公は沈勇の精神を必要とし、「一旦の血氣にては、下腐さへ死するならひ候得ば、まして士の死ぬるは不_レ珍事に候。最後迄も取しづめて、常々の心の如く、聊もせきたる氣色無_レ之、一きは深く見らるゝこそ、士の最後の下腐と違ふたる所にて候」と訓諭した。沈勇に關する意義を闡明し得て適確である。

如上、義公の文武觀で、文の技のみならず、文の心を説き、武の技のみならず、武の心を説き、以上二者の調和を必要とした。それに次いで「館記」の神儒調和といふ事も、義公が率先、説いた所である。

勿論、義公のみならず、林羅山らも既にこの點に觸れたが、何れかといふと、羅山は、儒教を尊重し、儒教を擁護しようといふ心持ちに重きを置いた様な所がある。義公になると、然うでな

る。元來、義公は、中和の道(西山公隨筆)といふ事を説き、何事も中正・調和を旨とした傾向がある。故に梅里先生碑文に於いて、「尊_二神儒_一、駁_二神儒_一」といふ事を明記し、神道の長短、儒の

是非を明確にして、その長とする所、その是とする所を探り、之を日本國體の精華を發揚するの助けとした。従つて、原則的には、神儒共に輕重上、差異なしとする態度を把持したと見られる。が、既述した如く、日本的自覺の上に立脚して、神道の醇正な旨意を崇重した以上、神道の精神を闡明すべく、儒學の理論を用ふるといふ様な意嚮が存した事は、想察に難くない。少くとも、日本國民の宗教たる神道を、儒教よりも重んずる心持が存在した事は當然であつたらうと思ふ。さういふ點を義公は、はつきり明言してをらぬけれども、彼が伊勢大廟を心から崇信し、その藩内の神社に、佛像を神體とする者があると、之を撤去して、神鏡・幣束に代へ、村松の皇太神宮（伊勢神宮の分靈を奉安す）が、中世以來、五所明神といつて神佛兩部に屬したのを純神道に復した如き遣り口を徴すると、義公の精神の存する所を略と推し得るのである。

その他、學問と事業の一致、舉國報恩の事は文道・武道を説いた所で、既に義公が觸れてゐる點であつて、特に一々、徵證するに及ばぬと思ふ。要するに、思想家としての義公は、超凡的で、特異の風格を有し、後に起つた烈公中心時代の水戸政教學に於ける諸要素を、その言説中に包含してゐたといつてよゝ。

第九 山莊に於ける哲人義公

義公の隱棲

政治家として、華々しい活動を續けた義公が西山莊（太田町）に隱退したのは、元祿三年、六十歳の時である。

義公と嗣子綱條との關係は、極めてよかつた。既記したやうに、義公は、兄頼重の子、松千代（綱方）、采女（綱條）の二人を養子に迎へたが、松千代は寛文十年、病歿したので、采女が綱條と名乗つて、嗣子となつた。綱條は、よく義公に仕へ、その教訓に従つたので、義公は安心するところが出來た。そこで元祿三年、跡を繼がせることにしたのである。

義公の隱退は、各方面から惜しまれた。その江戸を出發して、水戸へ歸るとき、送別の詩歌をよせたものが多い。それは雨の降る日であつたが、義公は、人々の厚情に酬いるため二首の歌を

詠んだ。

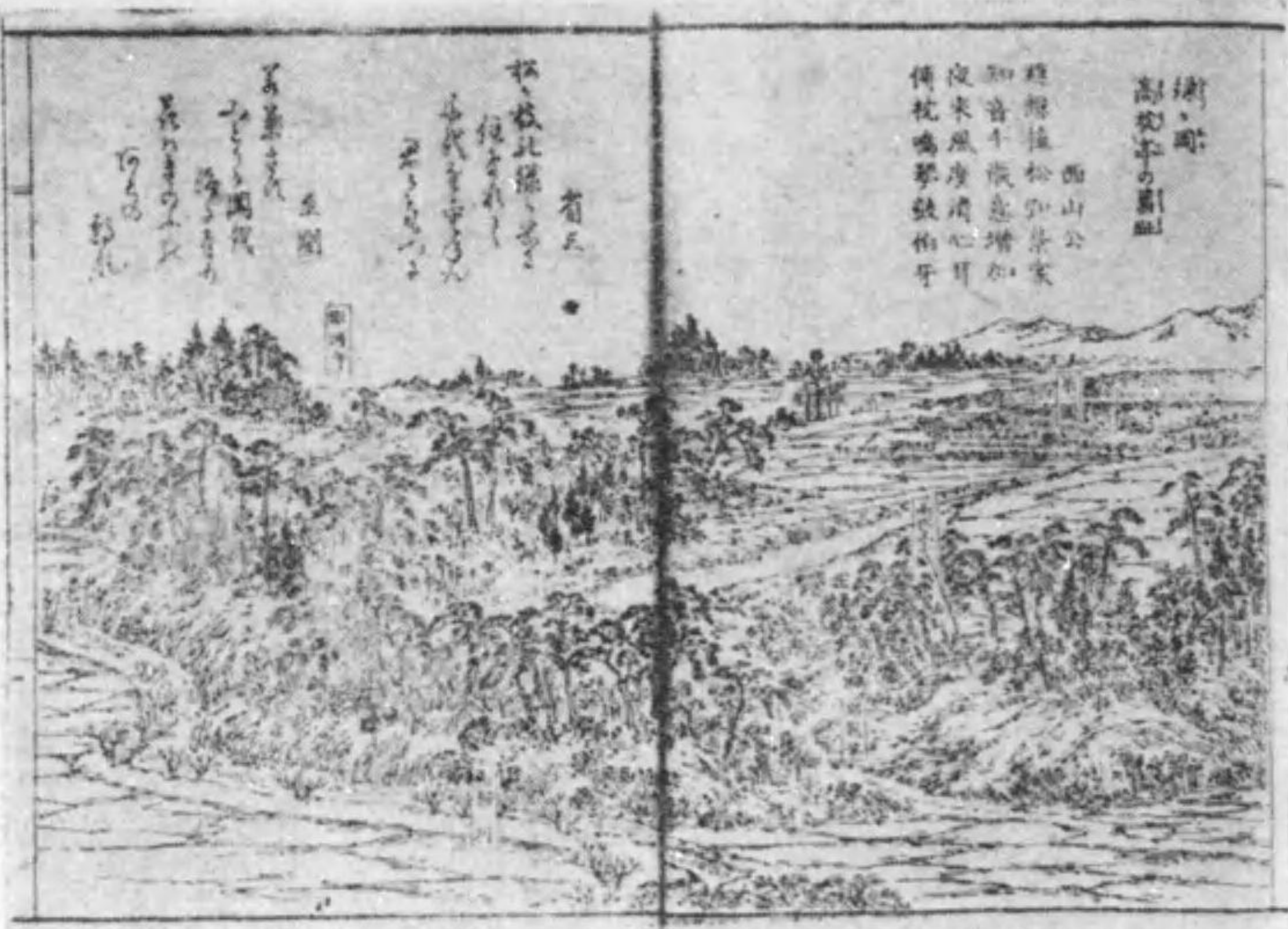
いとどなほ名残を思ふ老の浪たちかへるべき世をも知らねば

○

立わかれ又逢ふこともしら雲のひまなき雨をなみだとは見よ

傳ふるところによると、義公が西山莊の建築に著手したのは、元祿四年正月のことである。この地(太田町)を隱棲のところで定めたのは元祿三年の頃で、藩内巡視の折、この地形を見て、その幽邃・閑雅を喜び、且つ一方では、土地の人々に教化を施したいといふ考へもあつたところから、決定を見たのである。

この太田町の西山莊附近は常陸の北部に當り、もと佐竹氏の居城のあつたところで、附近のもの、よく佐竹氏になづいてゐた。そして佐竹氏がこの地から秋田へ轉封して以來、もう八十年にもなるが、尙ほその餘徳が残つて、佐竹氏を慕ふものが往々あつた。それらを手なづけてゆきたいといふのが義公晩年の望みで、やがてこの地に別莊を作ることになつた。ここに義公の深い考へが潜んでゐたのである。



岡 ケ 緑

便宜の上からいふと、義公に取つては、水戸城の西方、僅かに半里ばかりの距離にある緑ヶ岡(今の常磐公園と相對した丘地)の方がもつとよかつた。寛文五年、義公はこゝに別莊を設け、高枕亭をはじめ、君子林・窈窕坂などを作り、度々、學士らをあつめて詩歌の會を開いたのである。

その後、元祿九年になると、此處に手入を加へ、岡のもとを流れゆく櫻川の上流あたりに櫻樹を植ゑ、新しい花見の名所とした。それから程ちかいところにある千波湖を中心に、琵琶湖中心の近江八景に因んで、水戸八景を選んだ。蓋し緑ヶ岡の眺めは極めてよく、高見村の高臺

からは、すぐ筑波山の姿を望むことが出来るのみならず、櫻川の清流と千波湖の漣とを一眸のうち収める便宜があつた。

さうしたちなみにより、義公は、水戸八景を撰ぶこととし、(一)神崎寺の晩鐘、(二)梅戸の夕照、(三)柳堤の夜雨、(四)下谷の歸帆、(五)藤柄の晴嵐、(六)七面山の秋月、(七)緑ヶ岡の暮雪、(八)葑田の落雁を數へたのである。かく光圀には、ふさはしい別荘地があり、愛した高枕亭があつたにかかはらず、水戸から五里離れた太田町の西山といふところを晩年の隠棲として、ささやかな別荘を建てることにしたのは、主に佐竹氏を慕ふ人々を教化し、君臣一體の美を全うしたいといふ望みがあつたからだつた。

この事に與つたのは佐々十竹・杉浦彌衛門らで、いよく好地と見定めると、笹本次郎太夫に命じて、地ならしをさせた。然し、ここに別荘を置くといふことは固く祕密にしたので、平生、義公に隨從してゐた中村算溪さへ、多分小さい寺でも建てられるのであらうと思つた位だつた。

義公が西山に赴いたのは、元祿四年五月十日のことである。これより先、義公は、元祿三年十一月二十九日、江戸を出發して、水戸に歸住したのであるが、一體、義公の隠棲は彼の自發的な

心から出たのか、それとも幕府の命によつたかといふことについては、説を爲すものがある。傳へるところによると、義公には、元祿のはじめ頃から隱退の意があつて、時々この事を幕府の老中らに話してゐたが、その中、元祿三年十月十四日、阿部豊後守正秋が上使となつて、義公をおとづれ隱居すべき壽命を傳へたので、義公は喜んでこれに従つたといはれる。

そこで十五日、權中納言に昇任されると、義公は固辭した。が、許されぬので、之を拜命し、位山上るはくるし老の身は麓の里ぞすみよかりける

と所懐を詠んだ。これによると、將軍綱吉に對して隱居後の任官を好まなかつたことも思はれる。この事情については觸れないで置かう。さて、當時、義公が父の愛を深く示したことからして、傳へられてゐるのは、江戸出發に當り、綱條に置土産として、教訓の意を寓した五言五詩一篇を残した佳話である。

我今年致仕して故郷に歸る。仲冬二十九日夙に江戸の邸を發す。別れに臨んで、詩を賦し、兒九成に遺る。文點を加へず、口に任せて漫にいふ。一笑胡盧せよ。

元祿庚午の冬、跡を遁る東海の濱。

致仕して印綬を解き、縦まに葛天の民となる。」

曠漠の野に盤旋、榮辱の塵を一洗す。

昔首陽の薇に涎し、今吳江の蓴を羹にす。

三十有年來、夙志忽ち伸びんと欲す。

予去る何の處ぞ、再會の辰を知らず。

嗚呼汝欽め哉、國を治るは必ず仁による。

禍は閨門より始る、慎んで五倫を亂るなかれ。

朋友に禮儀をつくし、且暮忠純を慮れ。

古へ謂ふ君以て君たらずといへども、臣臣たらずんばあるべからずと。

閑雅な山莊の詩趣

義公は、水戸に歸りつくと、十二月五日(元祿三)藩士一同を城中の大廣間にあつめて、告別演説を行つた。この時、藩士はいづれも緊張した面持であつたり、靜かに姿を正して、ちつと義公

の説に耳を傾けた。これにむかひ、義公は、かう告げたのである。

「自分は、老來、病のため、兎角登城することも、心に任せぬところから、過般致仕の願ひを申出て許された。そして少將(綱條)に家督を命ぜられ、その上、中納言に任ぜられたのは、恐縮且つ満足の至りぢや。それに今後、諸君と親しく接することが出来るのも喜びの一つである。次にこの三十年來、自分の在任中不行届が多かつたにかかはらず、諸君が誠實に勤務してくられたのも深く感謝したい。ついては、今後少將に大切に奉公し、善政の實現につとめて貰ひたいと思ふ。それには温厚に篤實に聖賢の道に志し、自分の功名のために亂を思ふが如きことなく、また血氣の勇にはやることなきやう心してほしい」

かう義公は、訓示したが、尙ほ藩士の子たちに向ひ、若い主人を助けるについては、若いもの協力を特に要することをも告げた。この情理かね備へた告別演説は、深く藩士の心を動かし、老若いづれも感激の涙に咽びつゝ、つゝましく退出したのである。

やがて西山の別莊が出来上ると、義公は五月(元祿四)水戸をあとに、太田町へ向つた。この時、義公は柱に所感を書きつけ、

ここもまたかりのやどりをいてわびてなるゝぞつらきわが心かな
と詠んだ。

義公の山莊！

それは、太田町を
西に十餘町離れた
場所に位置し、山
間に斗入したとこ
ろにあつた。正に
幽靜、閑雅の仙境
にちかい。その山
莊の建て方は極*



屋根には、芝きり草が思ふ儘に生ひ茂り、廊下は板張で縁に竹を用ひた。特に義公の注意によつて、此處のみに見られるのは、座敷に闕を設けぬ上、次の間との隔てをすつかり取り去つたこと

西 山 莊

※めて質素で竹で編まれた
門扉には蔦蘿が這ひまつは
り、外に面したところに
は、一重の竹垣を結びめぐ
らし、その他は、山につづ
いて、圍ひを設けてなかつ
た。家の構造は皆二間足ら
ずの梁を用ひ、柱は杉の丸
太で高さ八尺五寸、萱葺の

で、ここに義公の客に對する平等な心持、階級のへだてを全く作らぬ精神が現はれてゐた。全體の姿は、どうしても小農の家、樵夫の住家を想はせるほどの質素さである。

が、流石に四邊の風致は立ち優つてゐた。砌の岩根からは、清い泉が迸り出て、その音はいかにも、すが／＼しかつた。そして庭の前には、義公の考案によつて、心字の池を掘り、屋のうしろにも亦池を作つた。この二つの池には、紅蓮、白蓮の花が、シーズンに従つて、美しく咲いたのである。

また義公は、書齋の前に梅、桂、玉蘭などを植ゑ、門の前には四五株の垂柳を配置して、趣を添へた。それから山莊より太田へ出る道——白坂の百姓家があるあたりには、數百株の桃樹を植ゑ、そのあたりをゆるやかに流れる増井川に一つの柴橋をかけわたして、これを桃源橋と名付けた。いかにも風流の心になつた命名である。

義公の書齋は僅かに三疊であつた。その書冊をいれる押入も、極めて簡單である。が彼は、これに満足し、ここで『大日本史』の監修に當つたのである。彼が讀書、執筆に倦んだとき、彼をなぐさめたのは、鶴・鹿・白鷺らである。

山莊で一番よく義公に親しんだのは、それらの禽獣だった。山に放たれてゐた鹿は、義公に馴れて、庭に入り来り、池にゐた白鷺は、義公を慕つて、時々、座敷に上つた。鶴も亦公によく親しみ、その姿を認めると、元氣よく彼の身邊に飛んで来た。かく山莊では、人も動物も一つになつて、親しい日を送つたのである。

義公の質素と平民主義

當時、義公の生活は、以前にくらべて、一層、單純であり、質實であつた。その隨從者は、大森典膳・佐々十竹・井上玄桐らを合せて、すべて二十三名である。そして義公には、別に隱居料といふものがなく、唯實費を綱條から受取ることにした。それは、義公の考へから出たわけで、隱居料が少いと、人々は綱條のことをかれこれいふであらうし、多いときは、義公について、何とかいふであらうから、實費といふことに定めたのである。

義公は、西山莊へ唯多くの書籍を携へて来た丈で、金銀・器物は、全く齎らさなかつた。それほど、彼は恬淡だつた。讀書・執筆・吟詠・晚酌などが義公の楽しみで、衣食住について簡單・

質素を尙んだ。在來、義公は茶の湯を好んだが、器物の欲が出るといけないといつて、西山莊では、ふつつりやめた。それに以前嗜んだ仕舞・能などもすつかり中止した。正に生活更新である。

西山莊に於ける食事は、野菜料理が主で一汁二菜に限られた。晚酌に用ふる酒は淡い粗末なもので、晝は用ひぬこととしてゐたが、雨の日は、時に飲用する折があつた。一體、義公は酒を愛して、江戸にゐた時代には諸侯や旗下の士を相手に毎日、痛飲したが、その優れた酒量に匹敵する者が殆どなかつたといはれる。そしてどんなに多く飲んでも、義公は酔つた姿を見せたことが一度もない。が、西山莊へ来てからは、すつと酒量を制限した。

當時、義公の衣服は古びた絹紬の小袖を用ひて、丸の中に葵といふ文字をつけたのを常紋の代りにつけてゐた。夜著は、うすい絹のもの一枚、うすい絹蒲團一つに限り、他は何も用ひない。そして義公の茶縮緬の頭巾は、昔ながらのものをその儘、かむつてゐた。袴も同様古いもので、茶苧の袴に限られた。何か儀式のある折には、道服・指貫を着用し、烏帽子・燕尾をかむることにした。

それから日常の起居についても、成るべく近臣の手を煩はさぬやうに心がけ、水戸へ出かけた
り、他へ旅したりしたときには、自分で床をのべ、また始末した。それに正月の門松はここでは
立てず、すべての
儀式は、これを略
したが、唯正月十
一日の具足祝の式
だけはいつも執り
行つたのである。

その日常の接客
は、開放主義で※



義公の道服

民は、義公になつき、親しみ、碁の相手となり、酒の友となつたものも往々あつた。

當時、義公の生活は、のび／＼したもので四季をり／＼の風景を楽しみ、詩歌に興を遣り、附
近を散歩して農民と語るといつた工合で、そのつれ／＼を慰めるのは讀書だつた。歌舞の類は全

くやめ、唯謡だけを續けたほかに、吟詠も最後まで、清い娛樂の一つにした。かうした自由な生
活、拘束されない生活のうちにあつても、禮儀は正しく、小姓頭以上のものが來ると、必ず袴を
著けて之に接し、些の情容がなかつた。

かく義公は、西山莊の生活に満足して、江戸へ出たいといふことは、日夜、近臣と心やすく話
す折も、一度だも申出さなかつた。或るものは、一度位、江戸へ出られた方が氣分が變つてよい
と勧めたが、義公は、之を用ひない。

「隠居した以上、江戸へ出るのは、身分にふさはしうない。自然、召出されたならば格別、自
分から進んで出府しようとは一向に思はぬ」

と義公はいつた。西山の一隠居！ 義公はかうした謙虚な、淡々たる心持であつたのである。従
つて、散歩や旅行の際、向ふから來る人を止めさせ、避けさせるのを絶対に嫌つた。

「世上のものは、その身分の高い、低いにかかはらず、何か用事を持つてゐる以上、無用のこ
とをさせたくない。現在、自分は一閑人で、何の用もない身ぢや。それが往還の人を自分のた
めにとめさせるのは、無意義である」

第九 山莊に於ける哲人義公
かう義公はいった。

二二六

義公の自傳

義公は、ここに來てから、雅號を西山隱士または西山樵夫とし、元祿四年十二月、その壽藏碑を瑞龍山に建て、題して、梅里先生の墓といつた。梅里といふのは、支那人吳の泰伯——賢人といはれた人——の墓所のある地名で、光圀は平生、泰伯の高風に共鳴しながら、かう命名したのである。

この壽藏碑に彫りつけられた自傳（梅里先生碑陰銘）は、義公一代の名文として、世に傳へられてゐるが、死生を超越し、悲喜を超越した高い心境が、その文字の上に現はれてゐた。そして朗かな、洒脫な氣分で、日々これ好日とする趣も亦そこに流れ出てゐる。

梅里先生碑陰銘

先生は、常州水戸の産なり。其の伯疾み、其の仲天す。先生、夙夜、膝下に陪して、戰々兢兢たり。其の人となりや物に滯らず、事に著せず、神儒を尊んで神儒を駁し、佛老を崇めて佛

老を排す。常に賓客を喜び、殆ど門に市す。暇ある毎に書を読み、必ずしも解する事を求めず。歡んで、歡びを歡びとせず、憂へて、憂へを憂へとせず、月の夕、花の朝、酒を酔んで適意、詩を吟じて情を放まゝにす。聲色飲食、其の美を好まず。第宅器物、其の奇を要せず。有れば則ち有るに隨つて樂胥たり、無くば則ち無きに隨つて晏如たり。

蚤きより編

史に志あり。
然れども書の
徴すべき罕な
り。爰に探り、
爰に購ひ、※
めて一家の言を成す。



義公壽像碑銘

※之を求め之を得、微遺するに稗官小説を以てし、實を據ひ、疑を闕き、皇統を正閔し、人臣を是非し、輯

元祿庚午の冬、累りに骸骨を乞ひて致仕す。初め、兄の子を養ひて嗣と爲す。遂に之を立てて以て封を襲がしむ。先生の宿志、是に於て足れり矣。既にして郷に還り、即日、攸を瑞龍山

先塋の側に相し、歴任の衣冠魚帯を瘞め、載ち封じ、載ち碑し、自ら題して梅里先生の墓と曰ふ。

先生の靈、永く此に在り矣。嗚呼、骨肉は天命所終の處に委せん。水には即ち魚鼈に施し、山には則ち禽獸に飽かしむ。何ぞ劉伶の罇を用ゐんや。其の銘に曰く、月は瑞龍の雲に隠ると雖も、光は暫らく西山の峰に留まる。碑を建て銘を勒する者は誰ぞ、源光圀、字は子龍

第十 義公の哲學と文藝

義公の世界觀・歴史觀

義公が好んだのは、文藝・哲學・歴史及び旅行である。彼は旅が好きであつたが、大抵領内を歩き廻つただけで、その他は下野、甲斐の一部、鎌倉や三浦半島に出かけたに留まつてゐる。「水戸黄門諸國物語」にあるやうな廣範圍に足跡を印したのでない。

旅中の一挿話として、義公の風手を想ひ起させるのは、筑波登山の時の態度である。筑波の下り道には、奇岩・怪石がごろ／＼してゐる。胎内くぐり、高原原・出船石・辨慶七戻りなど、いづれも、膽をひや／＼させる。中にも、飛禪定といふところは、第一の難所といはれてゐた。

義公は、案内者は導かれてこの飛禪定へ來た。そこは、萬丈とも思はれる深い谷を眼下に控へ、その上を飛び越して、向ふ側に足をつけるところは、大きな岩の上にくつも小さい石が重

つてゐて、眞實、足もとが危い。

が、案内者は物なれた態度で、深い谷を見下しながら、軽く向ふ側へ飛んだ。いかにも、恐しいが物馴れた藝當である。この有様に光圀の隨從者は眼がくらむやうに覺えた。この時、案内者は、義公に向ひ、この山内第一の場所を飛び越すことの興味を説いて、これを試みるやう勧めた。

が、義公は、これをはね付けた。

「自分は見ただで十分ぢや。行者になる身ではないから、強ひて飛び越す必要はない」

かういつて、すぐ元來た道へぐんぐん引返したのである。危きには近よらぬといふことを考へて、義公は、自重したので。そこに公の心持がはつきり浮んでゐる。

旅と同様、義公は、哲學が好きであつた。公は佛教・老莊・儒教・神道などを主に研究し、それ／＼要領を把握した。その態度は、義公自ら「神儒を尊んで神儒を駁し、佛老を崇めて、佛老を排す」といつたやうに、中正の姿を維持し、偏るところがなかつた。義公は、佛老、神儒の四つをそれ／＼尊敬したが、ゆがめられた老佛、ゆがめられた神儒は、これを好まなかつた。それ

に、日本精神の立場から、それ／＼公平に批判して、長短を取捨し、是正を加へることに心した。そこに義公の包容の量が大きいことを示すと共に、何事につけても、之に溺れることがなかつた様子を示してゐる。

一時、義公は、程朱學に凝つたこともあるが、それに囚はれる傾きは少しもなかつた。まだ孔子教にも、深く親しんだが、やはりこれに偏る趣を示さない。彼は、これについて、「濂洛の派を挹み、洙泗の春に遇ふ」といつたが、つまり、そのエッセンスと長所とを擷んで、義公一個の哲學を形造る上に役立てたのである。

かうして思索の力を鍛へた彼は、そこに一個の世界觀、宇宙觀を抱いた。ある意味で義公は、唯心的一元論に立脚してゐた。この事を「常山文集」中の「一の説」「如心の説」において説いた。

一の義たるや、あゝ至れるかな。得ていふべからず。推してこれを説けば、則ち道なり。理なり。無極にして太極、乃ち一のみ（一の説）

○

夫れ心は天地の至理、天下の達道なり。その天にある、これを命といひ、その人に賦する、これを性といひ、身に主たる、これを心といふ。命や性や心や、名は異にして實は一のみ。

(如心の説)

多即一、一即多といふことは、哲學するものゝ、考へ至るところで、義公は、この宇宙における雑多な、そして複雑な諸現象も、つまり、押しつめてゆけば、唯一個の絶對的な宇宙生命に歸一するといふことを認めたのである。その宇宙の根本生命を人間の上にあてはめて見ると、それは心にほかならない。心は一切の至理を具し、あらゆる現象を批判してゆく標準となるものだと、いふのが義公の見方で、物質的なものは、この心の力によつて、調整され、統一さるゝのだとした。そこに唯心的一元説が現はれてゐる。

本來、哲學の根本原則といふ上からすると、われ／＼の世界観は、唯心でもなく、唯物でもなく、物心一如である。物に即して物に囚はれず、心に即して心に囚はれず、この二つを調和、統制してゆくのが正しい。然し、義公の時代には、唯心的な傾きが相當、是認せられてゐたから、義公も亦さうした潮流の中に起つたのであらう。

かういふ風に義公には、一個の世界観があつたから、ここから次第に發展して、彼れ一流の歴史観、彼れ独自の樂天的人生觀を作りあげた。在來、義公については、唯大義名分を重んずる人、尊皇主義の人といふだけは、説かれて來たが、それ以外の廣い部面から義公を考察することを、存外閑却してゐた氣味がある。

彼の歴史観は、「春秋」「通鑑綱目」「神皇正統記」などによつて培はれたが、唯それを鵜呑みにしたのではない。義公一流の考へ方で、一個の史觀を築きあげ、水戸史學の一派を創造したのである。

義公は、壽碑の裏面に彫りつけた自傳（梅里先生碑陰銘）のうちで「皇統を正閔し、人臣を是非す」といつたが、それは、尊皇の大義を宣揚するためで、國史に現はれてゐるいろ／＼の現象も、問題も、事件も、つまり、尊皇の大義によつて、解釋しなければ、意義をなさぬといふのが義公の考へである。

事實、皇統を正閔するといふことは、非常にむづかしい。人臣を是非するのも、容易のことではない。が、眞に日本國體の尊嚴を擁護し、天皇政治の御精神を守り立て、ゆくには、尊皇主義

によるのほかに、これによつて、皇統を正閏し、これによつて人臣を是非するならば、妥當の旨を得ると義公は信じた。

かく義公は、彼の信ずる史觀により、「大日本史」の内容を統一してゆかうと意圖したのである。この點、主觀的色彩が濃く浮び出てゐるが、一方、彼は史實を明かにしてゆくためには、客觀的記述の方法により、科學的な行き方をした。その史料の撰び方、採り方においては、今日の精神科學としての歴史と略々同じ行き方をした。この事は既に説いた通りである。そして、それは、一々、一行乃至數行の記事について出典を明かにしてゐるから、この點科學的であるといふのみではなく、その方法學・補助學の上にも科學的な正しい行き方をしてゐるのである。

以上の意味で義公の歴史觀は、現代の新しい史觀に先驅したものを見られる。

それに義公は、年代記風に國史を書いたばかりで安心せず、文化史風の書き方と内容を備へることに心し、志類のうちで、この役目をはたした。そこには、經濟史・神道史・法制史・軍事史その他各種の文化現象を史的に眺めて、その變遷と歸趨とを明かにした。そしてこの志類の底を流れてゐるのは、皇政復古を熱望するところの力強い思想である。

悟道に達した樂天哲學

次に義公の樂天的人生觀は、彼の工夫・省察・鍛錬により、その知行一致・行學調和の旨により、作りあげられたものと思はれる。安藤年山の「手向草」によると、義公は、老莊風乃至佛敎風の人生觀にも通じ、物象を超越した絶對境に悠遊する心持にも味到してゐたやうである。

然し、老莊風の取りすぎた、すねたやうなところや、小乘佛敎の哀世的なところからは、全く離れてゐた。公は、いろいろの哲學に觸れたが、それに對して、自分の體驗といふことを重んじ、心的向上を自にかけて、晩年には、一種悟りの心境に到達することが出来た。この消息と信念とを、義公は自傳のうちに、かう書いた。

その人となりや、物に滯らず、事に著せず(中略)常に賓客を喜び、殆ど門に市す。暇ある毎に書を読めども、必ずしも解するを求めず。歡んで歡を歡とせず。憂へて憂を憂とせず。月の夕、花の朝、酒を酌んで適意、詩を吟じて情を放まゝにす。聲色飲食その美を好まず。第宅器物その奇を要せず。有れば有るに隨つて樂育たり、無くば則ちなきに任せて晏如たり。

義公の求めるところは、心の満足にあり、内部生活の充實にあつた。そして物質の上では多くを求めない。それは、他に對して、物質上の優遇をなすのを忘れたのではなく、公自身に處する場合に、物質的には澹泊であつたのである。

宇宙の根本生命を縮圖した正しい心！この心の充實が義公の目ざす生活であつた。心の楽しみ、心の澄明、彼は只管にこれを求めてやまなかつた。物質上のことは、彼に取つて、第二義のものにすぎないと考へた。

さういふ心持から、義公の樂天的な人生觀が生れてゐる。元來、公は聰明で、事に滯滞することを好まなかつた。また公は、恬淡を喜んで、物に執著するのを避けた。即ち義公は事物について囚はれないで、これを超越するの心境にゐることを心がけた。が、さうかといつて、すねるのではない。いつも明朗で、潤達で、快くどんな人にも逢つた。それは、西山莊に於ける生活を指したので、義公の平民主義は、附近の神官・僧侶・修驗者・農民らを山莊に吸ひよせて、毎日客で一杯だつたのである。

然し、雨の日など、客のないときには、靜かにつれづれを忘れるために讀書した。それは一字

一句に拘泥するのではなく、要點を掴むのである。面白いと思ふところを適意に讀むのである。蓋し義公は、書に讀まれるのではなく、書を活讀したのだ。これが義公の清い楽しみの一つであつた。

ここ迄は、修養次第で、誰でも到達し得るのである。然し、「歡んで歡を歡とせず、憂へて憂を憂とせず」といふ心的境地になると、中々至り難い。ともすると、人間は喜びに囚はれ、また悲しみに囚はれる。然し、義公は、事物のうへに超越する心持をもつたから、喜びにも有頂天にならぬ。悲しみにも浸らぬ。悲喜・憂歡を超越して、これがために心を動かされない心的境地に到達した。それは、悟りの心境である。明徹な心の世界である。

然しながら、義公は、さうかといつて、取り澄ますやうなことがなかつた。常人と同様、花鳥風月を楽しみ、四季をり／＼の自然を愛した。月が空に澄み渡るのを見るとき、花がうららかに咲き揃ふのに對するとき、義公は、これに感興を催ほして、酒も酌めば、詩も吟じた。かうして公の心をのび／＼させるのを何より快適としたのである。

かく義公の生活は清淡そのものであつた。そして内部生活の充實を只管求めてゐた。だから、

衣食住や聲色については、少しも欲求を持たぬのである。邸宅の美、飲食の美、聲色の美、器物の美、それらは、當時の諸大名はいつも求めてやまぬところであつたが、義公は、これに執著せず、有無に拘泥しない。日々これ好日である。そこにゆるがぬ樂天性が朗かに光つてゐる。

かかる思想を持つ晩年の義公は、一個の哲人といつて宜い。悟道の人といつてもよい。それだから、『大日本史』のやうな國家的な文化事業に没頭することが出来たのである。

義公の和歌に示した個性と趣味

義公はまた一個の文藝家としても、光つてゐた。彼はベンネエムを日新齋といひ、また常山人・率然子・梅里などともいつた。もとより彼は、文藝の士をもつて自らをつたのではなく、アマチュアとして、製作するのを楽しみとした。然し、彼の深い教養と高い氣品とは、おのづから彼の詩歌文章を特色づけたのである。

既にいつた通り、義公は、學問上、新派の身方だつた。學界の新天地を開いてゆくことに彼は限らない歡びを感じた。ところが、その詩歌文章は、いづれかといふと、古典的な方式と内容と

に満足した形が見える。といつて、保守に囚はれたり、固陋に流れたりしたところは、すこしもない。が、心持の上から、自然、古典的な方へ進んでいつた。

義公の書いた和漢の文章は、漢文の方において、文字の豊かさと綺麗とをつくしたあたりに、愛誦すべきうま味がある。然し、彼の自傳などのやうに、平易な書き方で、内容に深味のあるものが、より多く、義公の長所に出してゐる。和文は『梅花記』などが義公の才藻をよく現はし、支那の故事を活かし用ひたあたりに、氣の利いたところがある。

和歌・漢詩は、いづれも、自然味を尙んで、文字に苦心しないといつたやうな、率直な作に、義公の個性をよく出してゐる。つまり、技巧を弄したり、綺麗を街つたりしない方によいものがある。

公は隨時隨所に興の湧くにまかせて、和歌・漢詩を作り、多作の方である。それは巧拙如何よりも、義公自身が楽しむことが出来れば、それで満足だといふ工合が見える。いかにも達者に詠みこなす方であるから、時によると、過去の慣習・形式を追うて『古今集』あたりの短所を和歌の上に出した作もある。『萬葉』を十分に知つたにかかはらず、『萬葉』の感化が餘り見えない。

支那流の詩は漢唐あたりを標準としたと思はれるが、ともすると、文字の方に心をとられて、窮屈な感じのするものもある。これも、精金・美玉を撰ぶといふ方でなく、達者を旨とした傾きが見えてゐる。

然し、いづれも、大名藝以上で、優に一家をなしたことは、認められる。和歌の作には、四季をりくくの風景を詠んだものが多く、そのうちに、素直な見方、素直な表現をしたものに佳什がある。時に愛情を詠んだもので、現實感に突き入つた作にも、特殊の味を帯びたものを往々見受ける。

山深み人は訪ひ來ぬ柴の戸にひとり春知る軒の梅が枝

石そゞぐ音も涼しき山里の笥にあまる庭のやり水

荒磯の岩にくだけて散る月を一つになしてかへる波かな

風の音もまだ秋浅き草の戸に残る曇さも一しほにして

くれなゐに散るもみぢ葉を吹きまきて風も色ある山里の庭

たちぬはぬ天津乙女の雲の袖つゝみあまりて出づる月かな

老らくの身につむ年はわすられて花待ちえたる春ぞうれしき

老ひぬればいつも旅立つ心地してそれとなけれどいそがしきかな

ねざめする板間のあらし音冴えてわが世もふくる埋火のもと

ながめやる海づら遠く雲はれて波より出づる月のさやけさ

露むすぶ尾花が末を吹く風にきえゆく月の影ぞこぼるゝ

池水につがはぬ鷺鷥の心をば今ぞわが身の上に知りぬる

この「池水に」とあるのは、義公が最愛の夫人を喪つたときの作で、沈痛・適切に當時の心境をよく現はしてゐる。他に西山莊附近の春夏秋冬を詠んだと思はるゝ作に流石によく自然の妙趣に觸れたものが見える。義公は、西山莊の風光を愛し、その春の曙の美しさは、花の都にも優つて、なつかしいことを自ら歌つた。ひとり、それは春ばかりではなく、山家の味を湛へた夏秋の趣も、冬の姿もすべて奥ゆかしく、塵に汚れぬ眞趣を湛へたのを何よりも好んだのである。かうした消息が公の和歌の上にもらされてゐた。

義公は山家にひとり春にさきがけた梅の花をよるこび、笈の水のすが／＼しさを愛し、紅葉の風に舞ふ山里の幽趣に共鳴した。殊に木枯吹く冬の淋し味のうちに人生を冥想するのを好んだ。「ねざめする板間の風音さえて」の歌は、深い寂寥と哀感とを交錯して独自の味を湛へてゐる。

その他、義公の老境に入つた時代の實感を詠んだ「老らく」と「老ひぬれば」の二首は、いかにも適切で、眞面目に人生を味はふ義公の心境をさながらに示した、共に味深い作である。

詩歌の上に現はれたオリエンタリズム

義公の漢詩は、故らに支那めかさない作によいものがある。自由に、のび／＼と公の見たところ、感じたところを率直に述べた點に、独自の風格が見られる。いづれかといふと、敘景詩よりも、抒情詩に佳仕がある。また主客兩觀を交錯した詩にうま味を持つてゐる。

その詩に現はれた思想は、日本的といふよりも、オリエンタルといつた方が、ふさはしい。唯心的に超脱を求め、清逸を愛し、澹泊や簡素を喜ぶ心持が流れ出てゐる。義公の詩には、「歎息す兩部習合神」と歌つて、神道の純粹性を尙び、「義家の芳名は諸葛に逾ゆ」といつて、源義家が兵家として孔明にまさつてゐるといつたやうなことを詠じてゐるが、それと共に東洋的趣味を深く愛したのは事實である。

遊後樂園觀紅楓
臨池遠

夾岸霜楓水底句
微風緩動墨江鱗
山頭杜曉物皆醉
笑殺鸚鵡千歲人

西山

義公詩稿

○孔子像贊

上古神聖、夫子を俟つて名あり。
後世の君子、夫子を以て成る。
夫子の道は、天地とともに享しみ
夫子の徳は日月とともに明かなり。

○隱者を送る

眞隱會て名利の侵すなし。
清風颯々として塵襟を拂ふ。
只黄卷を繙く北窓の裏。
占め得たり淵明高臥の心。

○彰考館觀櫻宴席上

開落す古今の中、百花一陣の風。
經に酔ひまた史に酔ふ、酒に聖賢の功あり。

○心越禪師、短律一篇を授じて予が致仕して

常州に歸るを賀す。即席芳韻に庶ぐ
將に結ばんとす香山社、冠を掛けて洛陽を辭す。
身は塵世を兼ねて遠く、心は野雲とともに長し。
寂爾として書窓靜かに、燦然燈影ならぶ。
考槃す巖谷の士、腹を鼓して虞唐を食む。

○今春火を蒲田の林中に避く。地靜かにして
人稀なり。伎を相して幽を卜し、艸庵落成
す。是に於いて坐臥偃側自得自適し、悠然
として漫筆。

地僻にして嘉致を得たり、四隣松竹高し。
月は篩ふ千畝の影、風は奏づ五湖の濤。
足れり矣蝸舍を營む、樂む且に鸚鵡高に集るを。」

何ぞ美まん輪奐の美、只喜ぶ此の堅牢を。

○大方高岡に上る、安積澹泊來會す

遠人偶と來り止り、解后相逢ふを喜ぶ。

舊を話して多情密に、高きの上つて萬景供る。

稻田翠浪を翻し、松蔭金風すすし。

終日屢く酒をたのしむ、更に澆ぐ磊塊の胸。

○新 春 吟

華田今半ばを過ぐ、屠蘇漸く後酌、

偶と隨ふ莊士の列、未だ減ぜず少年の心。

松は自ら門を夾んで立ち、鳥は初めて谷を出て吟す。】

春來つて先づ陟帖す、瞻望す筑波の陰。

○賢息九成の初度を賀す

始めて仕へて春秋に富み、官途大猷を掲ぐ。

功名長へに朽ちず、人世久しく留まり難し。

顔回の短きをいふ勿れ、奚ぞ彭祖の壽をなさん。

我聞く仁者は壽なり、何をか願ひ亦何をか求めん

○九月十三夜

九月の佳名我邦に鳴る、

會て聞く雅什忠通に始ると。

時これ善し遶ふ桂花の會、

節去つて猶香し籬菊の風。

連夜の渴望今夜足る。

季秋再び得たり仲秋の中。

來賓の行雁數行の字、

清光を點破して紙窓に臨む。

以上の詩は、義公の清く高い生活、澹泊、洒脱な生活をよく現はしてゐる。多くを求めず、寡

慾に甘んじて、靜かに自然、人生に對し、悠々迫らぬ佛が見える。「詩は人也」と私は沁々想ふのである。それと共に六十一歳(華甲)をすぎた義公が新春の吟詠で、「未だ減せず少年の心」といつたあたりに、西山隱士としての彼の若々しい、潑刺とした彈力ある氣持を察するのである。

文藝の人義公、思想の人義公、そこに彼の個性の優秀と卓越とがおのづから示され、辭句や詞藻以上に大きく映る公の姿に渴仰を禁じ得ぬ。

昭和十七年十月一日印刷
昭和十七年十月五日發行

水戸義公を語る
定價金壹圓五拾錢

(二、〇〇〇部)

認 承 協 文 出
號 240252 ア



著 者	高 須 芳 次 郎
發 行 者	東 京 市 神 田 區 錦 町 一 ノ 二 三 井 田 宗 一
印 刷 所	東 京 市 神 田 區 神 保 町 三 ノ 廿 七 法 文 社
印 刷 者	大 庭 公 平

發 行 所

東 京 市 神 田 區 錦 町 一 丁 目
振 替 東 京 二 三 九 四 四
電 話 神 田 二 三 八 一 一
會 員 番 號 一 〇 二 五 〇 三

株 式 會 社 井 田 書 店

終

